第九九回日本医史学会総会シンポジウム　日本における医史料の蒐集と保存について

医史料の収集、保存管理についての提言

とくに日本医学図書館協会に期待するもの

司会　寺畑喜朔

明治初期には文明開化のもと、欧米より怒濤の勢いで文物が日本に移入され、日本人は挙って新知識を享受した。三十年代に入り、日本の医学界は習熟期となり、学問の糧となる和漢洋の医学書、関連雑誌の収集とその活用のため、各地に医学図書館が設立された。例えば、成医会文庫、好生館横井文庫、日本医学図書館、京都医学図書館、大阪医学図書館、広島医学図書館、洪庵文庫、長尾文庫、長与衛生文庫などである。筆者は以前に京都医学図書館、大阪医学図書館の設立と沿革について調査した。その結果、収集された図書は散逸しており、関係者らに存在の有無を尋ねても、全く適切な回答は得られなかった。筆者の所持する目録の中には今日貴重書として取り扱われるものも少なくないが、それらの存否は残念ながら不明である。

ところで、現在創立七十年の歴史をもつ日本医学図書館協会の存在を見直し、かつ重視しなければならない。

この協会は昭和二年設立の医科大学付属図書館協議会・長崎、岡山、金沢、新潟、千葉の五医科大学を源流として、年を追って参加大学が増えて今日に至っている。その歴史的過程を考えれば、この協会が率先して古医書収集、保存、

管理について声を大にして、その必要性を強調すべきではなかろうか。にもかかわらず、同協会機関誌『医学図書館』を通覧しても、確たる提言は見当たらない。近年の同誌をみると、誌面の大半は図書管理のための電算化資料の紹介で占め、機械雑誌化しており、この協会設立の草分けの一人であった緒方富雄先生は泉下で嘆いておられることであろう。

現代日本では地域ごとに医学教育機関があり、古医書をはじめ医史料一般にわたり、収集保存管理の気概があれば、貴重な医史料の寄贈、寄託が容易になるはずである。文部行政当局の強力かつ積極的指導にまつ所以はここにあるのである。

ここで、日本医史学会自体どのように本件について取組むべきか、まず、会員各自が収集保存してきた医史料をせめてその概要について、特色などを公開し、機関誌である日本医史学雑誌に所載欄を設けて順次公表することが望ましい。既に筆者と交流のある会員の中には、個人的に目録を作成、また、作成中の方々があり、心強いかぎりといわねばならない。

また、本学会が先導役となり、関連の歯学、薬学などの諸学会へも積極的に史料の収集、保存管理について呼びかけ、この問題の解決へむけて相互に交流を密にすべきであろう。まずは、「隗より始めよ」を想起し実行にかからねばならない。

先年、わが国の医育機関において保存する古医書等の存否について、弘前大学松木明知教授の貴重な報文があるので、参考資料として四六頁に転載する。